

「神の前の豊かさ」

(ルカによる福音書 12:13-21)

ある人が、遺産のことで自分の兄弟を説得してくれ、と主イエスに願いました。遺産のことが頭から離れないのでしょうか。この人の姿は、誰しも重なるところがあるのではないのでしょうか。財産のことで、自分の生活、食べていけるかどうかですから、非常に切実な心配事、命に関わる問題です。主イエスの前にいるのは、わたしたちと同じ心配事で一杯の人間です。主イエスは語り始めます。「どんな食欲にも注意を払い、用心なさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」

主イエスは富や財産そのものを否定してはいません。主イエスは「食欲」に注意を払いなさい、と言われたのです。「食欲」とは、飽くことなく欲し続けることです。食欲の行き着くところは、富や財産を拝むことです。これさえあれば生きていける、神など必要ないと信じることです。だからこそ主イエスは、遺産のことで頭が一杯の彼に、食欲に陥った「愚か者」のたとえを語るのです。

たとえに登場するのは、土地が大豊作に恵まれた金持ちです。この金持ちのセリフ、原文で見ると一人称のオンパレードです。直訳はこうです。「わたしの実りを、わたしが集めるために、わたしは何をすべきか。」「わたしの倉をわたしは壊し、より大きいものをわたしは建て、そこにすべての麦とわたしの良い物をわたしは集める。」彼の頭のなかは「わたし」で一杯です。他者も神も入り込む隙間はありません。神はこの人間を「愚かな者」と呼びます。彼は財産を死によって没収されることも、それが「いったいだれのものになるのか」も知らずに、偶像を両手に抱えながら、安心を手に入れたと浮かれているからです。主イエスは、この人を「神の前に豊かにならない者」だと言います。豊かさを自分だけに留め、自分のためだけに用いる生き方は、神から厳しく非難されます。

先週の福音は「主の祈り」でした。主の祈りの主語は「わたしたち」です。主イエスは日々、折にふれて「わたしたち」と祈りなさいと教えられたのです。それ程に、わたしたち人間はすぐに「わたし」に支配されてしまうからです。いつも「わたしたち」という主語で祈り続けなさいと主イエスが教えられたのは、それが「神の前で豊か」にされる生き方だからです。「すべてのものは主の賜物」であることを忘れず、感謝して「わたしたち」のためにささげることができますように。